手を洗う

父は五十八歳で逝った。戦時中は近衛兵で皇太子、いまの上皇殿下の護衛を務めた。戦後は自衛隊に納入する潜水鐘の設計をしていた。国防や国益という言葉をよく父の口から聞いた。父は息子が防衛庁に入ることを望んだが、私はその方向には進まなかった。父は昔柔道をしていて大柄だったが、実に

神経質だった。職業がら図面を引いたりするので枝葉末節にこだわる性分だった。

そういえばきれい好きでよく手を洗う癖があった。

「近衛兵あがりだから潔癖症だった」と九十九歳の母はそう想いだす。

父は二十歳で広島から東京へ召集された。多分、あの手を洗う習慣は国が強制的に躾けたものだろう。

「殿下の御物を汚い手で触れてはならない」

LIFE C173-b

とか言われて――。

父は読書家ではあったが、古本は好まなかった。いつも新刊書を丸善の包装紙で丁寧にカバーして読んでいた。母も古書を嫌い、「誰が触ったか分からないものを家に持ち込まないで」と言っていた。

そんな家庭で育った私が古書愛好家になったのだから、世の中わからないものだ。了

令和五年五月十日記

LIFE C173-b